

～新渡戸記念の～

『言葉の院外処方箋』

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

第39回『コロナ哲学：がん哲学に学ぶ

～「機会をつくるのも、それをを用いるのも、人であります」～』

コロナ時代の、3連休（1月9日、10日、11日）の始まりである。昨日（8日）、筆者の本の韓国語訳が送られて来た（画像1）。上田龍三先生（愛知医科大学 医学部 教授、名古屋大学 医学系研究科 特任教授）から、『名古屋大学免役講座（西川博嘉教授）のSeo Wooseock先生に問い合わせたところ、以下の説明を受けました。「Seo先生の説明文を転記させていただきます。日本の医師、樋野興夫先生の「明日この世を去るとしても、今日の花に水をあげなさい」という本の翻訳版です。真ん中は「3千人のがん患者に生きる希望を与えた言葉の処方箋」と書いてあります。」最近、韓国では樋野先生の本がブームらしいです。』との暖かい励ましのメールを頂いた。また、垣添忠生先生（国立がんセンター名誉総長、日本対がん協会会長）の秘書の方から、「日本駐在の韓国人に英訳していただきましたので、御参考までにお伝えします。」との真摯なる誠実なメールを頂いた。

昨日（8日）は、『「がん患者本位のエンゲージメント」を目指して～がん患者が社会で自分らしく生きるための3つのビジョン』（日経BP）が送られて来た（画像2）。58ページの『全国展開する「がん哲学外来」』に筆者が紹介されていた。次は、『コロナ哲学～がん哲学に学ぶ～』の特集が、企画される予感がする。1月10日は、定例の読書会である。今回は、『代表的日本人』（内村鑑三 著）の『西郷隆盛～新日本の創設者～の1章：1868年の日本の維新』である。まさに、「機会をつくるのも、それをを用いるのも、人であります」の復習の時である。

고려나피 음싱사 일애
 요사주 음물 이꽃 글오



画像 1

「がん患者本位のエンゲージメント」 を目指して

がん患者が社会で自分らしく生きるための
3つのビジョン

「がん患者本位のエンゲージメント」を考える会



あるべきがん患者の生活と がん医療の将来を徹底的に議論！

本書は、がん患者団体の代表者、がん診療に携わる医師・看護師、社会学者など、さまざまな有識者が集まり、がん医療や、がん患者が抱える課題・生き方などについて定期的に議論してきた「がん患者本位のエンゲージメント」を考える会（座長：武藤徹一郎）による報告書です。がん患者を取り巻く今の状況をより良いものとするために、3つのビジョンと10のアクションを提言。がん患者、その家族、がん診療に携わる医療者、がんの政策立案に関わる行政官など、がんに関係するすべての人々にとっての必携の書です！

「がん患者本位のエンゲージメント」を考える会 報告書

画像 2